

# 障害者生活支援センターたかまつだより

## ～国際白杖の日啓発活動～

白杖(はくじょう)とは視力障害のある方が持つ白または黄色の杖のことです。白杖には「視覚障害を持つことを周囲に知らせる」、「触覚を通じて路面の情報を収集する」、「路面上にある障害物を検知する」機能があり、肢体不自由、聴覚障害、平衡機能障害がある方にも使用が認められています。道路交通法では、目が見えない方やそれに準ずる方が道路を通行する時は政令で定める杖を携えるか政令で定める盲導犬を連れていなければならないこと、運転手は身体に障がいがある方が車いすで通行していたり白や黄色の杖を持った人や盲導犬を連れた人が歩いている場合は一時停止か徐行をして、これらの人の通行を妨げないようにすることが定められています。

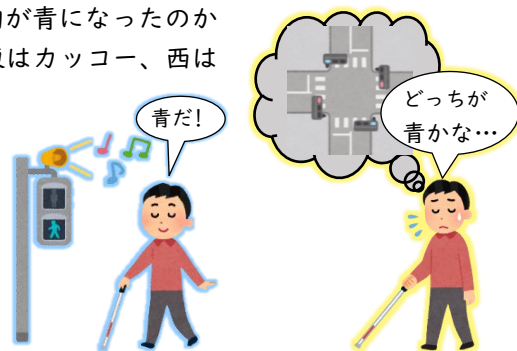
国際白杖の日は「視覚障害への認識・関心を高めること」などを目的として、1970年10月15日に世界盲人連盟(現:世界盲人連合)によって制定されました。香川県視覚障害者福祉センターでは啓発活動の一環として「歩いて知ろう!! 視覚障害者の視点で安全・安心な歩行環境について」と題した交通安全教室を開催、私たちも参加させていただきました。当日は当事者、ガイドヘルパー、関係団体、行政、警察関係など約60名が参加し、第1部ではJR高松駅から高松市生涯学習センターまでの整備環境を歩きながら確かめ、第2部では香川県の整備状況や課題について話を伺いました。

高松駅の南には横断歩道の中央に点字ブロックを敷いたエスコートゾーンが設置されています。視覚障害者の通行をサポートする設備ですが、設置数は令和3年末で全国に2,815ヶ所しかありません。車の往来によって点字ブロックの突起が潰れてしまうことは避けられず、「強く踏みつけないと突起を感じない。」との意見がありました。

交差点に近づくと「ピヨ」「カッコー」「信号が青になりました」などの音が聞こえます。これは音響式信号機と呼ばれ、以前は「通リゃんせ」などの楽曲が多く使われていました。しかし、多方向へ道が伸びる場所では「どの方向が青になったのか

分からない」との声があがり、現在の擬音式へ変更されてきたそうです。東はカッコー、西はカカッコー、南はピヨ、北はピヨピヨなどと設置しますが、この方向は国内で統一されていません。また、信号機は常に稼働しているため、この音に対する苦情もしばしばあり、音響式信号機の設置には住民への配慮や音の選定が重要となります。

道路について驚きや発見があったと同時に、当事者の方が常に危険と隣り合わせであることを再認識しました。共生社会、バリアフリーについて考えさせられた1日となりました。



エスコートゾーン



## ～防災企画～

温暖で比較的災害の少ない香川県ですが、近い将来に南海トラフを震源とする被害が予測されています。被害を軽減するためには「自助(自分と家族の命や財産を守るために自ら防災に取り組むこと)」、「共助(近隣住民や被災者と互いに助け合うこと)」、「公助(行政による公的な支援のこと)」の連携が必要です。

今回は「自助」と「共助」を一緒に考えることを目的とした防災企画に参加させていただきました。重度障がい者のシェアハウスと指定避難所であるコミュニティセンター間を徒歩で往復。避難経路と道中の危険箇所の確認、参加者による意見交換を行いました。

参加者は当事者家族、シェアハウス職員、行政、関係機関、民生委員などです。写真は移動時の様子ですが、各々が大きな荷物を手にしています。必要最低限なものだけで、一人につき数個の荷物が必要となります。今回は参加者で分担した荷物も、実際には限られた人数で、しかも車いすを押しながら運搬しなければなりません。風雨の中ではより困難な状況となることが容易に想像できます。また、絶えず続く車いすからの振動は、普段から強い緊張状態にある当事者の方にとって大きな負担となり、片道20分強の移動でしたがとても疲れた様子が見られました。

みなさんがお住まいの地域でも避難訓練が実施されていると思います。無理のない範囲で日頃から挨拶や会話を交わし、近隣住民に自分の存在を知ってもらうことで援助活動を受けやすくなります。また、市町村には、災害時に自力で避難することが困難で、特に支援を必要とする方が避難支援を希望する場合、その方の情報を登録する「避難行動要支援者名簿」があります。この情報は地域の関係者に提供され、日頃からの見守りや災害時の安否確認、避難誘導などに活用されます。登録には条件があるため、お住まいの自治体やケアマネージャー、相談支援専門員などへご相談ください。



## ～当事者語りの会～



もやもや病とは…  
国の指定難病の一つで  
脳の血管に生じる病  
気。脳の血液が不足す  
ることによって脳出血などを  
起こすことがある。後  
遺症として運動麻痺、  
言語障害、高次脳機能  
障害などが見られるこ  
ともある。

支援センターたかまつでは、同じ課題や境遇を持つ人が、互いに支え合い、助け合うピアサポート事業を行っています。自らの経験をもとに、同じ立場にある他の人を支援する役割を担う人をピアサポーターといい、現在5名のピアサポーターが個別相談や講演会などで活動されています。

今回は泉本美鈴さんによる病院職員向け講演会の様子をご紹介します。泉本さんは19歳で「もやもや病」と診断、35歳の時に「脳梗塞」を発症し、視覚障害と高次脳機能障害の診断を受けました。講演では発症から現在に至るまでの心身の変化や想いを、「脳梗塞発症まで」、「リハビリ病院転院から生活訓練まで」、「就労継続支援B型事業所での仕事」に分けて語っていただきました。

参加者の大半が病院職員ということもあり、入院中や退院後の様子について特に関心をもたれたようです。「患者さん目線での心情を聞いて良かった。」、「患者さんに聞いてもらう機会があってもいいかもしれない。」、「今後の看護に活かしたい。」といった感想が寄せられました。また、「障がいを負い単身で生活している方」、「受傷後に復学や復職された方」などの話を聞いてみたいとの意見もいただきました。

ピアサポーターの方は勉強会などを通じて研鑽を積み、日々の活動へ熱心に取り組まれています。泉本さんもご自身で原稿を作成し、それを暗記して講演会に臨まれました。話の内容が整理されており、声の大きさや話す速度、穏やかな口調はとても心地よいものでした。誰かに悩みを聞いてもらうだけで心が軽くなるかもしれません。ピアサポーターの方に相談してみたいことがあれば、支援センターたかまつまでご連絡ください。最後に、泉本さん、貴重なお話をありがとうございました。



## ～発達にじいろ広場 自由っこ～

基幹相談支援センターとして、地域の社会資源を発掘するために、障害福祉に関する事業所を訪問させていただいております。今回は多肥上町にある「発達にじいろ広場 自由っこ」に見学に行かせていただきました。

発達障害が世間的にも認知が広まり、さまざまな情報があるなか、自分の子どもが発達障害なのかと不安になる親も少なからずいらっしゃるかもしれないので、そのような時にも活用できる居場所だと感じました。入り口は子どもの力だけでは、開けることができないような扉になっているので、広場からとびだしていく心配がなく、自由に外も動き回れるようになっています。外にもブランコやトランポリンがあり、楽しく遊べる遊具がたくさんありました。建物は2棟あり、嫌なことがあったときに落ち着くまで過ごすことができる場所と、遊んだりしゃべったりできる場所がありました。クールダウンできる場所には小さなテントがあったり、勉強ができる机と椅子が用意されたりしていました。遊んだりしゃべったりする場所には、本やおもちゃなどたくさんの物があり、壁には1歳のとき2歳のとき、こんな発達の状況だったよというような情報を付箋に貼って、みんなが見られるようになっていました。

代表の森様から、「地域の子育て支援センターに子どもを連れて行っても、さらに自分の子どもの発達の遅れを実感してしまったり、動き回って他の人に迷惑をかけるので、連れていけないと思っていたりする親もいます。そんな親子さんに特に利用してほしい。」と仰っていました。子どもが遊べるだけでなく、専門の先生をお呼びして、親が発達について学べる勉強会や子育ての悩みを相談できるおしゃべり会なども開催しているそうです。興味を持たれた方は、「発達にじいろ広場 自由っこ」とインターネットで検索していただくとサイトがあります。開所日などの情報については、下記の通りです。地域の社会資源などについて、今後もたかまつだよりで案内できたらと考えております。

開所日：毎週月・水・金、第1・4土曜日（祝日は休み）※開所ができない日もあるので、Instagramを確認ください  
時間：9:30～13:00

料金：1回100円（イベント実費あり）、登録料500円 ☆初回は無料、イベント以外の予約は不要、駐車場あり



【お問い合わせ先】 障害者生活支援センターたかまつ

〒761-8057 香川県高松市田村町1114番地 かがわ総合リハビリテーション福祉センター内

電話 087-815-0330 / FAX 087-867-0420

ホームページ <http://www.kagawa-reha.net/shogai-shien.html>

利用時間 月～金曜日、第1・3日曜日 午前9時～午後5時（第2・4金曜日は午後7時まで）

※年末年始（12月29日～1月3日）及び祝日を除く